
ヌケヌケサン

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヌケヌケサン

【Nコード】

N5856V

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

ヨシコは下校途中にある下水口が嫌いだった。その大きな黒い穴を見ていると、何となく不安になってしまふのである。でも、必ず通る場所にあったので、無視することもできなかった。友達は、そこをヌケヌケサンと呼んでいた。

ヨシコは、下校途中にある下水口が嫌いだった。

フタがされてなくて、とてもイヤな感じがする。しかも、真っ黒くて、汚くて、とても大きい穴なのだ。長い坂を下った辺りにあったので、お母さんがいつも危険だと怒っていた。

その大きな穴をヨシコは覗いていると、一歩、また一歩と自然に近寄ってしまうのだ。なぜか、足が止まらない。どうして、そんな事をしてしまうのか、自分でも分からなかった。ただ、その大きな穴を覗いていると、時折、何かが通り抜けているような気がするのだ。流されていく腐った葉の塊のように黒くて、濡れてて、ぬらぬらと光っている、何か。それを見掛けると、ジッとしていられない不安な気持ちになる。どうしても、ヨシコは穴を覗かずにはいられなくなってしまう。

ダメだと分かっている、止められなかった。

坂下にある大きな下水口のことを友達は、ヌケヌケサン、と呼んでいる。たぶん、みんなで嘲笑って怖いという気持ちを隠そうとしていたのかも知れない。それが何となく分かっていたヨシコは、できる限り下水口の近くを歩かないようにしていた。学校の帰り道は気をつけて道の真ん中を歩くし、親と出かける時でもギュッと手を握りしめてソッチに行かないようにしていた。

近寄らなければ大丈夫だ、そうヨシコは思っていた。

それは、ある寒い日だった。

母親から夜から天気が崩れると登校前に注意されていたのだが、

学校の用事で下校が遅くなってしまったのだった。ヨシコが慌てて正門に出た時には、外は真っ暗、帰り道を遮るように空から沢山の雨が降り注いでいた。

ごおうごおう、と風が唸りを上げる。

ぴしゃーく、と雷が吼える。

ひゅおんひゅおん、と送電線が踊っている。

ただ、そんなのヨシコは怖くなかった。どんな音が鳴ろうとも気にもせず、土砂降りの中を走り出していた。このぐらゐの雨なんかへっちゃらだった。

きつと帰ったらお母さんがお風呂を沸かしてくれている。どんなに体が冷えたとしても、直ぐに濡れた服を脱ぎ捨て湯に飛び込めばいいのだ。

家に向かってヨシコは走り続けた。

一応、ランドセルの中に折りたたみ傘は入れてあったが、こんな強風の中で使うと壊れてしまうから止めよう、そうヨシコは考えていた。親に何度も何度も頼んで、やっと買って貰ったお気に入りのお傘なのだ。こんな日に使ってやるものか、そうヨシコは思った。

ヨシコの足がピタツと止まったのは、例の所まで来た時だった。

あのヌケヌケサンが怒ってる、そう感じていた。大きな穴に大量の雨水が流れ込んでおり、ずおおお、という化け物みたいな音を立てているのだ。ゴミ袋やバケツや動物の死骸まで、全てのモノを飲み込んでいる。もし、そこに間違って落っこちてしまったら、何処まで流されてしまうのだろうか。

そう、思ったヨシコは唾を飲み込んでいた。今まで服が雨で濡れていても平気だったのに、なぜか急にズッシリとした重みを感じられる。ずっと走ってきたから息は上がってるのに、なぜか体の芯が寒くなってきた。

でも、このままじゃ家に帰れない。

そう思ったヨシコは走り出した。ヌケヌケサンの反対の道側を全力で駆け出したのだ。もう無我夢中だった。本当なら細い路地の手前では一度停止しなければならぬのに、そのまま突っ切っていった。

もし止まったらどうなるのか。

その先を考えるだけでヨシコは恐ろしかった。

だから、いつも以上の速度で走った。

——それがいけなかったのだろう。

ヨシコは派手に転んでしまったのだ。膝から崩れるように、ドスンという音を立てて倒れ込んでしまったのだ。ああ、直ぐに立ち上がらなきゃ、そう考えたのだが、大量の雨水がヨシコの体を坂下まで押し流そうとしてきたのだ。

「きゃあああああ！」

倒れた痛みを感じる暇もなく、ヨシコは必死に叫んだ。

ただ、本能が呼びかけてきたのか、手足だけは懸命に動かしていた。何かに掴まろうとした。地面に爪を立てようとした。足で踏ん張ろうとした。でも、全て油のように滑ってダメだった。どうしても止まらない。坂の上から下まで滑ってしまうのだ。

その先には怒ったヌケヌケサンが大きな口を開けて待っていた。

まるで糸の束のような太い濁流が全てを飲み込んでいる。

その光景を見てヨシコの耳から全ての音が消えた。

何も聞こえなくなった。

目から色が消える。

体が重い。

ああ。

ダメだ。

そう思ったヨシコは、急に手足をだらしなく投げ出していた。そしてズリズリと坂を滑り落ちていったのだ。灰色の空から落ちてくる雨粒を顔で受け止めていると涙が溢れてくる。それは止まらず、もう何で濡れているのか分からなくなっていた。

ヨシコは何となく確信していた。

もうダメなのだ。

どんなに逆らった所で私はヌケヌケサンに食べられてしまう。

どうしようもない。

子供の私が勝てるような奴じゃないよ。

あれは化け物なんだから。

全てを受け入れるようにヨシコは体から自然と力が抜けていった。

——それが良かったのだろう。

体を浮かさずにいる事で地面との摩擦力が増し、背負っていたラ
ンドセルの一点に体重を預けたので抵抗力が強まった。雨水と一緒に
流れていたヨシコが、坂の途中で止まったのだ。体は擦り傷だら
けで痛し、スカートはボロボロだし、もう少しでヌケヌケサンに食
べられそうな位置まで落ちてきてしまった。

だが、それでもヨシコは助かったのだ。

「うううう……」

止まった、そう感じたヨシコはもっと泣いていた。立ち上がるこ
ともせず、もっと涙を流していた。ヨシコは、もう本当にダメか
と思ったのだ。もう死んでしまうと本気で諦めたのだ。立ち向かうの
が怖くて、分からないから怖くて、結果を知ってしまうのが怖かっ
たから、全てを受け入れようとした。

その方が楽だった。

いま考えると、そんな考えをしてしまった自分が怖かった。

簡単に諦めてしまった自分が怖かった。

何より、そんな弱い自分がイヤだった。

「くそ」

苛立ったようにヨシコは涙を拭いた。

イヤだった。

負けっ放しは。

こんな情け無いままの自分なんか。

いつまでも俯いていなきゃいけないのだってイヤだった。

だって、悔しいじゃないか。

そう考えたヨシコの目に、光りが戻っていた。
いつだって頑張るしかない。

ヌケヌケサンなんか怖くないさ。

「……え」

弱さを受け入れた上で決意したヨシコが立ち上がろうとした時、
坂の上から大量の落ち葉が流れてきたのだ。赤子のような黒い塊が、
ずるる、と滑り落ちてきていた。

そして、ストーンと落ちてしまう。

怒っているヌケヌケサンの大きな口へ、ヨシコも一緒に――。

(後書き)

連載にと考えたのですが、短編に切り替えました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5856v/>

ヌケヌケサン

2011年8月9日03時28分発行